第６学年　国語科学習指導案

日　時　平成16年１０月２７日（水）　５校時
児　童　第6学年　男9名　女15名 計24名
授業者　教　諭　照　井　理恵子

１．単元名　「言葉と文化について考えよう」（６年　下巻）
　　教材名　「外来語と日本文化」渡辺　実

２．単元（教材）について

第５学年および第６学年の国語科の「Ｃ読むこと」の目標は、「目的に応じ、内容や要旨を把握しながら読むことができるようにするとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。」である。さらに、内容においては「（１）読むことの能力を育てるため、次のことを指導する。」とあり、「イ　目的や意図などに応じて、文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえること」「エ　書かれている内容について事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読むこと」とある。

本教材は、第５学年上巻の「言葉の研究レポート」で「言葉」を題材とした学習を踏まえて設定されている。第６学年上巻の「火星に生命をさぐる」など、科学を内容とする説明的な文章とは違い、文化に関する内容である。この時期の児童であれば、「文化」という抽象的なテーマについて考えることも可能になってきている。また、歴史や国際化の学習などを通して、現在を時間的流れの中で、とらえることも可能であろう。今、自分が何気なく使っている言葉、自分を取り巻く言葉が実は長い歴史をとおりぬけ、多くの国の人々との交流の産物であるという認識は、児童のものの見方・考え方の幅を広げるに違いない。文章構成は、問題提起・例・筆者の考えという尾括型の典型的な形である。また、文末表現で事実と筆者の意見とが区別されているため、要旨をとらえやすいものになっている。本教材は、ただ外来語の紹介やその由来を知ることだけでなく、「外来語」の奥に潜む「異文化の交流」について考えることや、言葉を文化の一つとして考えることが、その大切なねらいである。「外来語と日本文化」の内容は、室町時代や江戸時代に入ってきた外来語が、話題の中心である。現代の外来語について話を進めると、話題の内容が入り組んでしまい、全体像がつかみにくくなってしまうからである。本教材は、すっかり日本語化して、生活の中に定着している語を取り上げているため、児童に理解しやすい。

本学級の児童は、説明的文章の学習において、内容に興味を持ち学習に取り組むことができる。また、国語で学習した内容に関連のある図書を読もうとする姿が見られるが、説明的な文章の段落の内容が事実や例示であるのか、また、筆者の意見であるのか、十分に理解できない児童がいるので、文末に着目しながら学習を進めてきた。また、学力検査の結果を見ると「叙述に即して読む問題」の落ち込みが見られた。

指導するに当たっては、段落ごとの細かい読み取りではなく、全体像を理解した上で要旨

の理解と、児童の発展的思考を促すように指導を進めていきたい。その際には、本教材の特長を生かし、事実を述べている文なのか筆者の意見なのかを、文末に注目しながらはっきりさせ学習を進めたい。そのためには、重要語句となる言葉に着目させながら、丹念に指導していく必要がある。また、読み取りに入る前に漢字や音読練習に取り組ませたい。

本単元の学習を通して培う、的確に文章を読み取り要旨を理解する力は総合的な学習での学び取る力を支えるものである。要点をとらえて情報収集する際、解決活動で得た情報をまとめる際に、基礎となる。また、この単元の[ひろげる]の段階における活動過程は総合的な学習の時間における学習過程と関連があり、総合的な学習の時間の学習を支える学習である。

３．学習指導目標

〈目　標〉

◎言葉と文化について関心を持ち、文章を読んで要旨をとらえ、自分の課題を持つ。

◎課題について取り組んだことをまとめて展示物を作り、「言葉と文化」展示館を開く。

〈関心・意欲・態度〉

〇日本の言葉と文化に関心をもち，課題を決め解決のための方法を工夫したり，資料を探したりしている。

・言葉と文化について自分の考えをもちながら文章を読み，内容を的確に押さえながら要旨をとらえようとしている。

〈話す・聞く能力〉

・展示物をもとに，課題を選んだ理由，感想，意見などをわかりやすく話す。

〈書く能力〉◎各自取り組んだ内容を、分かりやすくまとめる。

◎調査した内容を効果的に表現するために、発表の方法を工夫する。

・調べたことの中から必要な事柄や資料を選び、整理する。

〈読む能力〉◎言葉と文化について考える目的で文章を読み、内容を的確に押さえながら要旨をとらえ、要約する。

◎書かれている内容について、事例と感想、意見の関係を押さえ、言葉と文化について自分の考えをもちながら読む。

〈言語についての知識・理解・技能〉

〇語感・言葉の使い方などに関心を持つ。

・文語に親しむ。

・言葉についての由来や歴史、特質などについて理解を深める。

４．単元の指導計画　（１４時間扱い　本時５／１４）

[つかむ]　〇生活の中の外来語の多さに気づき、感想をもつ。・・
　　・生活の中の外来語の多さに気づき、感想をまとめる。　　（1）

[みとおす]〇内容に興味を持ち、単元の見通しを立てる。・・・・・・
　　・前時の感想をもとに、自分の生活と外来語を関連付け、提示される問題、課題解決などの見通しを持つ。

〇「外来語と日本文化」を通読する。・・・・・・・・・・・・・・・・・（1）
　　・　通読し、形式段落と 3 つのまとまりに分ける。
　　・　難語句、新出漢字について調べ、確認する。

[ふかめる]〇３つのまとまりに分けて問題提示の部分を見つけ、自分の課題として意識する。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（2）
　　・問題提示の部分を見つけ、課題とする。

〇２つのまとまりを読み、課題の答えを見つけてまとめる。・・・（1）（本時）
　　・１つめのまとまりの課題をもとに、課題の答えを見つける。
　　・課題の答えを要約する。

[まとめる]〇外来語クイズにこたえ、外国で使われている日本語も知る。・・
　　・そのままの発音と意味で使われている外来語の存在を知り、文化は交流していることをつかむ。　・（1）

〇学習のまとめをする。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
　　・二、三のまとまりを元に、学習をしての考えや感想を書いてまとめる。

[ひろげる]〇「現代を生きる五音、七音」を読み、例文（詩など）を声に出して読んで、リズムを楽しみ、感想を話し合う。・・・・・・・・・・・・・・　（1）

〇自分の課題を持ち、「言葉と文化」展示館を開催する。・・・・・・（7）
　　・「言葉と文化」展示館での課題を決める。
　　・発表に向けてグループ単位で、「何を」「どのように」調べ、「どうまとめるか」をはっきりさせながら、活動を進める。
　　・中間発表会をする。
　　・中間発表会での評価をもとに、つけたしや修正を行い、発表に向けて完成させる。
　　・「言葉と文化」展示館を開催する。

５．本時の指導

（１）　目標

・二つめと三つめのまとまりを読み、外来語は日本への入り方の違いによって意味が限定されることを要約することができる。

（２）　具体の評価規準

Ａ：二つのまとまりを読み、自分から文章構成・言葉の使い方・文末など着目し、文章の内容をわかりやすい表現を使い要約することができる。

Ｂ：二つのまとまりを読み、文章構成・言葉の使い方・文末など着目し、文章の内容を要約することができる。

（３）　展開

	学習内容と活動	学習上の配慮事項	評価観点
つかむ５分	１．前時までの学習を想起する。 ２．学習課題を確認する。 なぜ、カードやカルタやカルテは、日本語に入ったとたんにどれも意味がせまくなり、別々のちがう言葉のようになったのだろうか。	○　前時の学習を想起し、Ｐ33 以降に答えの部分があることを確認する。	〔読む〕 前時に学習した学習の課題が想起できたか。
みとおす10分	３．本時の学習場面を読む。 ４．課題解決についての見通しをもつ。	○まとまりを意識させるために一斉に読む。 ○カード、カルタ、カルテが書かれている段落を中心に読むことを見通させる。 ○重要語句（片仮名の言葉・時代を表す言葉）や文末表現（伝わってきた、入ってきた）に着目することを確認し、予想させる。	（読む） まとまりを意識して読むことができたか。 （意欲） 課題解決の見通しを持つことができたか。
ふかめる	５．答えになりそうな部分をさがし発表する。	○カード、カルテ、カルタを文中から見つけさせる。 ○見つけられない児童には、個別に支援する。	（読む） 答えになりそうな言葉を見つけているか。 ※サイドライン

16分	６．出し合った言葉をもとにカード、カルタ、カルテについてワークシートにまとめる。 ７．課題の答えを抽象的な言葉で表現している部分を見つける。	○必要に応じ３つの中から例示する。 ○カードについては話し合いでまとめる。 ○課題提示文に対し、答えの文を読みながら、自然な流れになっているか、考えさせる。	〔書く〕 カード、カルタ、カルテについて、「いつ」「どこから」「どのような意味・形でつたわってきたのか」など短くまとめられているか。 ※ワークシート
まとめる10分	８．カード、カルタ、カルテがちがう言葉のようになったわけを全体で要約する。 国と国の交わりは、いつごろ、どのような交わりを結んだかによって、受ける影響もさまざまであり、カード、カルタ、カルテの意味の違いはこれらの言葉をもたらした国々と日本との交わりの違いが反映している。	○ワークシートを生かしてまとめる。 ○「カード」以降だけでなく、「交わりの違い」を理解させるため、「国・・・」も押さえる。	〔書く〕 ・外来語は新しい文化とともに日本に入ったが、その入り方によって意味が限定されたことをつかみ、要約することができたか。 ※ワークシート
ひろげる４分	９．本時の学習を振り返る。 10．次時の学習内容を知る。		

（４） 評価

・二つめと三つめのまとまりを読み、外来語は日本への入り方の違いによって意味が限定されることを要約することができたか。

（5）板書計画

言葉と文化について考えよう

外来語と日本文化

なぜ、カードやカルタやカルテは、日本語に入ったとたんにどれも意味がせまくなり、別々の違う言葉のようになったのだろうか。

カルタ　室町時代　ポルトガル　遊びに使う数と模様のついた厚紙をさすもの

（一番早く日本と交わる）

カルテ　江戸時代　ドイツ　医者の使う厚紙を指す

（医学の面で交わる）

カード　江戸時代　イギリス　かなり広い範囲の厚紙を指す

（広く交わる）

国と国との交わりは、いつごろ、どのような交わりを結んだかによって、受ける影響もさまざまであり、カード、カルタ、カルテの意味の違いはこれらの言葉をもたらした国々と日本との交わりの違いが反映している。